

〈翻譯と註解〉

## ディオゲネス・ラエルティオス第10巻（一）

——エピクロスの巻——

渡 邊 雅 弘・譯

本稿はディオゲネス・ラエルティオス（Diogenes Laertius）『(ギリシア)哲学者列傳』(Diogenis Laertii, Vitae Philosophorum. 以下D.L. と略記)の最終巻、すなはちエピクロス一人を対象とし、著者による評傳とエピクロスの手翰三通及びアフォリズム集『鑰となる洞察』を内容とする第10巻の邦譯である。(邦譯中の丸括弧内の文章は譯者の補ったもの。)これまで新たに發掘された母親宛手翰等の碑文の關係諸斷片と、1888年にヴァチカン法王庁の書庫で發見された所謂『ヴァチカン箴言集』(十四世紀の寫本)は含まれてゐない。三百巻に垂んとする著述があつた言はれるエピクロスの、今に傳はる稀少な史料のほとんどすべてが本巻に集約されてゐることになる。

翻譯のテキスト底本は、

G.Arrighetti, *Epicuro: Opere*, Giulio Einaudi, Torino, 1973

とした。テキストに誤植が散見されるが、伊譯と豊富な斷片、註解が附いてゐる。

他に参照したテキストは以下のものである。

H.Usener, *Epicurea*, Teubner, 1887 (repr.)

P.von der Muehll, *Epicvri: Epistvlae Tres et Ratea Sententiae a Laertio Diogene Servatae*, Tevbner, 1922 (repr.1966)

C.Baily, *Epicurus: The Extant Remains*, 1926 (repr.1979)

Ch. Jensen, *Ein neuer Brief Epikurs*, Berlin, 1933

E.Bignone, *Epicuro: Opera, Frammenti, Testimonianze sulla sua Vita*, Roma, 1964

R.D.Hicks, *Diogenes Laertius*, vol.2, Loeb Classical Library, 1979

O.Apelt, *Diogenes Laertius: X Buch, Epikur*, 1921 (Felix Meiner, reperi.1968)

A.Laks, 'Édition critique et commentée de la *Vie d'Épicure* dans Diogène Laërce (X,1-34)' (in J.Bollack et A.Laks (ed.), *Études sur l'Epicurisme antique*, Cahiers de Philologie, vol.1, Paris, 1977)

A.A.Long & D.Sedley, *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols, Cambridge U.P., 1987

M.Conche, *Épicure: Lettres et Maximes*, P.U.F., Paris, 1987 (reperi.1995)

(H.S.Long, *Diogenis Laertii. Vitae Philosophorum*, vol. 2, Oxford Classical Texts, 1964は使用しない。)

語彙集は次のもの。

H.Usener (ed. M.Gigante et W.Schmid), *Glossarium Epicueum*, Dell'Ateneo & Bizzarri, 1977

近代歐米語譯は汗牛充棟であるが、これまでの史料を最も包括的に扱った大著は、

M.I.Parente, *Opere di Epicuro*, Torino, 1974

邦譯には、以下のものがある。

ヂョジェシス原著/シ、ヂ、ヤング譯注、谷本富・重譯「哲學ノ濫觴」

學術志叢6, 7, 8, 9 (明治17年) [邦譯ではなくちよつとした紹介にすぎないが、ディオゲネス・ラエルティオスに多少とも纏めて言及したものとしては、本邦初出の記事かと思はれる。エピクロスへの言及は僅か。

雜報「最古の哲學史書」(ヂラセネシス・ラエルチュース) 哲學會雜誌15 (明治21年) は次出の短い紹介記事。]

ラエルチオス・ヂオゲネス著/曉烏武雄譯 (曉烏敏・序)【エピキユラスの哲學】、香草舎 (石川縣・北安田)、昭和9年。[上記 C.Baily, *Epicurus: The Extant Remains*, 1926の英譯から

の重譯と、譯者が斷つてゐる。]

速水敬二・坂田徳男編著『哲學者の言葉——希臘の卷』、小山書店、昭和  
13年 [摘譯]

出隆・岩崎允胤訳『エピクロス——教説と手紙』、岩波文庫、1959年。  
[上記C.Baily, Epicurus: The Extant Remains, 1926が底  
本。]

戸塚七郎訳「エピクロス——メノイケウス宛書簡、他二編」(『世界人生論  
全集1』、筑摩書房、昭和38年、所収)

森進一訳「エピクロス——メノイケウス宛書簡、要説、断片」(田中美知  
太郎編『ギリシア思想家集』、世界文学大系63、筑摩書  
房、1965年、所収)

近藤映子「イエンゼンの「エピクロス第四書簡」」広島大学文学部紀要  
27-2 (1967年)

山本光雄・戸塚七郎訳編『後期ギリシア哲學者資料集』、岩波書店、1985年。  
ディオゲネス・ラエルティオス著/加来彰俊訳『ギリシア哲學者列伝(下)』、  
岩波文庫、1994年。

武井英明訳「ディオゲネス・ラエルティオス、著名哲學者の生涯と見解  
(エピクロス)」立正大学教養部紀要28 (1994年) [未完か?テ  
キストの邦譯のみで、註解はない。]

## I. 評傳エピクロス (D. L. x. 1-138)

- 1 エピクロス(前三四二/一年~前二七〇年)は(父)ネオクレースと(母)  
カイレストラタとの嫡子、つまりアテーナイ市民で、この國の市區のう  
ち(東北郊の内陸部にある)ガルゲーツス區(の區民名簿)に原籍(1)を  
もち、英雄フィライオス(2)を遠祖とする(元サラミス領主で、アテーナイ  
に移住した名門世襲貴族の)末裔のひとりだと、(エピクロス腹心の)メー  
トロドーロス(3)が『(エピクロスの)義俠心』で傳へてゐる。そして中で

もその出色の傳を載せたヘーラクレイデース（・レムボス）(4)の『ソティオーンの（『哲學者たちの系譜』全十三卷）摘録』によると、「巨擘エピクロスは、（母市の市民権を保持した）屯田兵入殖(5)で（前三五二／一年、エピクロスの二親を含む）アテーナイ人たちが（イオーニアの娘市）サモス（島）へ渡海した後、その地で（十年後に）生まれ長じて十八歳（前三二三年）(6)になると、（二年の兵役に就く爲に海路）アテーナイへ出府した。時に（カルケドーンの人）クセノクラテスは（アテーナイ市西北郊にあつて、プラトーンの遺した）アカデーメイア學苑を根城に暮らし、他方アリストテレースは（瀆神罪での起訴を逃れる爲にアテーナイから遁走し、母親の遺した邸のあるエウボイア島西岸中部の）カルキスで餘命を繋いでゐた（翌三二二年に死去）。しかし（かつてこのアリストテレースを師傅とし、東征からの歸還の途次、大邑バビュロンで）急逝したアレクサンドロス、このマケドニアの大王の（享年三十二での）薨去を機に（勃發した後繼者戦争と、アテーナイを中心に希臘諸國が反マケドニアの叛旗を翻して蜂起した所謂ラミア戦争のさなか、サモス 島に屯田兵入殖の）アテーナイ人たちは、（バビュロンから小アジアに進攻した大王後繼の王家の攝政）ベルディッカスに驅逐された（前三二二年）。(7)ためにエピクロスは（除隊した前三二一年、二十歳でアテーナイから海路、サモス島直近の大陸部にある）コロフォーンへと向かひ、その安否を問ふて（既にサモス島から退散してゐた）父を探した。|そして久しくその地（の父の許）に逗留して（私塾の）弟子を幾人も取つたが(1)、アナクシクラテスがアルコーン（筆頭執政官）の時（前三〇七／六年。時にエピクロス三十三、四歳）、今度は（弟子たちを帯同して海路）アテーナイへと引き返した。そこで、（スニオンのソフォクレースの提案で、丁度外人による哲學舎主宰の禁令が敷かれたが、市民権をもつエピクロスは外人ではなかつたので、）暫く弟子たちと心をついに力を合はせて心術の究明に勤しみ、やがて独自の説をく唱へ(2)、當人に因んで後にその名を冠して呼ばれる社中を旗揚げした。(3)」ところで、「心學に觸れたのは、」當人の述懐によると、「(手習所の

2

業を卒へる) 十四歳になつた時のこと」(4)だといふ。實際、エピクロス社中の(“第一人者”)アポロドーロス(5)は『エピクロスの一生』第一巻にかう誌してゐる。「あの人<sup>1</sup>が心術に身を投じて(サモス島での)手習所の師匠どもを笑つたのは、この手合ひが(読み書き算盤音楽を教へてゐながら)文字の講釋ひとつあの人に<sup>2</sup>してやれない益暗揃ひだつたからなのだ。聯中は(ホメーロスとともに手習ひ教本の定番である)ヘーシオドス(『神統譜』)の言ふ“カオス(空隙、割れ目)”(6)の件りの委細に暗かつたのである。」しかし(ペリパトス派の)ヘルミッポス(7)が別に傳へるところでは、「手習所の教生(8)だつたエピクロス風情が、あらうことかその後、<sup>3</sup>出會つたのが運の盡きで、(あの食はせ者の悪黨)デーモクリトスの巻本に次々と入れ込んでその心學にいかれたのだ。|それで名うての(懷疑派)ティモーン(1)の啖呵はエピクロスをかう斬り捨ててゐる。

“かてて加へて、自然學者の滓の滓、犬畜生にも劣る下種野郎、サモスくんだりから(アテーナイへと)御出座しの、

手習ひ稽古の教生風情(2)が。その無知蒙昧は、比類を絶した天下の一品。”]

しかし、(デーモクリトスの巻本に)感化され(デーモクリトスを)超えた(、イオーニアの雌伏時代の)エピクロスとともに心術を極めやうとする人々がゐた。まづは(家族で)當人の實の三兄弟ネオクレース、カイレデーモス、アリストブロス(3)が擧げられるが、そのことは社中のフィロデーモス(4)が『心術の達人綜攬』第十巻で傳へてゐる。のみならず家僕(男奴隸)までもがまた然りで、その名をミュスといつた。こちら(の前代未聞の事實の方)はミュローニアノス(5)の『類は友を呼ぶお話集』に載つてゐる。

さてストア派のディオテモス(6)はエピクロスに瞋恚の炎を燃やし、不俱戴天の仇に向かふ遣り口でこの人を誹謗中傷した。淫らな私信を五十通もエピクロスの手と謀つたのである。もとを糺せば(同じストア派の)クリュシッポス(7)の手になる數多の痴話文を、やはりエピクロスの

- 4 手書だと捏ち上げた輩も一人ゐる。|そればかりかストア派のポセイドーニオスの一派(1)、そして(ダマスコス)ニコラオス(2)も、ソーティオン(3)も——その『反ディオクレイオス論』と題する二十四巻本中の第十二巻で——、(小アジア南西部はコス島直近の)ハリカルナッソス者のディオニュシオス(4)もいづれもが同腹の顔ぶれで、例へばかう譏言したのである。——エピクロスはお袋と方々を回り歩いては兎小屋の民家を狙つてその片づけや掃除を押し賣りするかと思へば、親父の片腕として読み書き算盤音楽を教へる手習所を営んだが、(5)目腐れ金の稼ぎしかなかつた(素寒貧)。そればかりか實の兄弟の一人を男娼に仕立てた女術で、しかも自分は<sup>うたひめ</sup>絃妓レオンティオン(6)の間夫(ヒモ)におさまつてゐる(えげつなさ)。一方、デーモクリトスからは原子説を、アリストイッポスからは快樂説をばくつておいて、わが獨創と嘯く(あざとさ)。(7)それにエピクロスは(サモス者で)生粹のアテナイ人ではないのに市民面をして(不動産をせしめたあくどさ)(8)。そのことはティモクラテースなども認め、(腹心の)ヘーロドトスも『エピクロスの壯丁(兵役)時代』で證言してゐるとほり。(9)しかも(マケドニアの権力者)老ミトレース(10)に胸が悪くなるほど媚び諂ひ、この(アレクサンドロス大王後繼の一人)リュシマコスの三太夫に書信を呈する都度、「救ひ主アポロンの君」とか「<sup>ごぜん</sup>御前」だのと(淺ましい美稱や尊稱を)奉る(阿漕さ)。|
- 5 この媚び諂ひは十八番で相手を選ばず(社中や絃妓にも及び)、イドメネウス然り、ヘーロドトス然り、ティモクラテースまた然りで、エピクロスの云爲が(窺ひ知れぬ神のそのやうに)いかに深遠であるかをよくぞ世間に喧傳してくれたと(1)、この社中どもを褒めちぎり、それを多として猫撫で聲のおべんちやら。それに一再ならず痴話文を(絃妓)レオンティオンに奉り、「癒しの神、わが主なる愛しのレオンティオンちゃん、<sup>しもべ</sup>僕は心中やんやの快哉を叫んでめろめろです、お前の色好い打ち解け文を一讀に及んで」と(齒の浮くやうな胡麻をする)。(私信の例は他にもあつて、小アジアは在ラムプサコスの)テミスタなるレオンテウス(2)の奥

方宛の手翰でも「小生は、お二人に當方（アテーナイ）へ御來駕戴けな  
いとなれば、矢も盾も堪まらず韋駄天で何處へなりと、お二人の、わけ  
でもテミスタ様がお召しの處へ參上仕りますですよ」と（媚を賣る）。  
ピュトクレース(3)宛の附け文でも、この若盛りの美青年に「ここに坐し  
て御身の御越しを鶴首してゐる老生をどうくわ喜ばせて下され。（率然  
として目映いばかりの）神の御來臨かと思紛ふ御出座しをどうくわ」と  
（その歡心を買つてゐる）。なほテミスタに寄せた別便でも、「|奥様には  
（わが社中）達人の免許皆傳を請け合ひます|（4）」と（その意を迎へて附  
け入つたと）難じたのは（ストア派の）テオドーロス(5)で、その『反  
6 エピクロス論』第四卷にこの記事がある。|

## 註解

### 1. エピクロス評傳

1 (1)エピクロスの生涯についてはUsener, *Epicurea*, S.405-406に便利な年譜  
と解説がある。

ガルゲットス區は、クレイステネスの創設した新10部族のうち、ア  
ッティカ内陸部、アテーナイ東北郊にある「アイゲイス」部族を構成す  
る、廣域で極めて重要な市區の一つであつた。クレイステネスによる市  
區制の導入以前から、面積と人口の規模の大きな集落であつたらしく、  
市區制の導入後は、五十人にも及ぶ民會の政務委員を輩出した。マラト  
ンとアテーナイを隔てる、内陸部、ペンテリコン山南麓の背斜に位置し  
ている。ペンテリコン山は、狩獵場のあるパルネス山、養蜂場に適した  
ヒュメットス山（位置不明）とともに、アッティカ三山（Paus.1.5.32）  
の一つをなし、パルテノン神殿を始めとする、神殿建築や彫刻に不可缺  
の大理石を豊富に産する石切場があつた。Paus.6.22.7、Plut.*Thes*.13に  
はガルゲットスに関する簡単な言及がある。

なほ、エピクロスは同區で産聲を上げたと思解されがちであるが、二

親の屯田兵入殖後に生まれたエピクロスの誕生地はサモス島であつて、ガルゲーツス區には、アテーナイの制度上、父親からの世襲で永久の原籍（本籍）が登録されたものであらう。エピクロスの三兄弟ネオクレース、カイレデーモス、アリストプロス（D.L.x.3）に就いても、その誕生地がアテーナイかサモス島か、定かではないが、いづれもその原籍（本籍）は當然、ガルゲーツス區に置かれたはずである。原籍（本籍）は、居住地（現住所）の移動による変更が許されないものであつた。（P.J.Rhodes, *A Commentary on the Aristotelian Athenaion Politeia*, Oxford Clarendon Press, 1993, pp.251~256. アリストテレス／村川堅太郎訳『アテナイ人の国制』、岩波文庫、1980年、177頁、訳註⑩、参照。）それ故、居住地（現住所）と原籍が一致しない場合も多々生じた。しかし、原籍（本籍）は、義務の履行を含む市民権の公認、民法上の権利の主張や行使には不可欠の条件として、極めて重要であつた。かうしてサモス島生まれでも、エピクロスはアテーナイ市民権を保持してゐたらしく、前323年、二年の兵役義務（のち前301年、この「國民皆兵制」の廢止後、壯丁訓練も一年に短縮の志願制に移行）を課せられる一方、「庭園」購入といふ不動産の取得と所有の権利が保障されたようである。Cf. D.L.x.4「エピクロスは生粋のアテーナイ人ではない」とある。

空前の商品・貨幣經濟の發展と貧富の格差の擴大を通して、貴族支配と抗争し、それを根底から揺るがす民衆層の擡頭を背景に、前508年、クレイステネスは血縁に基づく貴族優位の舊4部族制を廢止して、地縁の行政單位を基盤とする新10部族制編成を斷行した。それは、ゲノス（氏族）からデーモス（區）へと、後戻りできないアテーナイの「制限民主制」化の推進に決定的な役割を果たした。この部族制の新編成では、アッティカ（市域を含むアテーナイの領土）全土の「中心市域」、「沿岸部」、「内陸部」という3地域の分割と、この各地域の更なる10區域への内分、すなはち「トリッテュス」（三分の一の意）と呼ばれる30の「區」（デーモス）への細分化が斷行された。新「區」には、主に神話上の人

物や英雄（半神）の名が採用された。かうして劃定された「區」が民主政下の市民團編成の最も基礎的な單位となり、「中心市域」、「沿岸部」、「内陸部」に配置された30の「區」の中から、各地域が抽籤で一つずつ選んだ3「區」の組み合わせで統合した1「部族」（フューレ）が、新たに10部族に再編成されたのである。地理的に分離された飛び地とも言ふべき3「區」を人為的に統合した各部族には、「區」の規模の大小や人口比の相違はあつても、市域部と田園が必ず含まれ、歸屬區民の階層や職業も概ね平均化した。各「區」では、「區長」（デマルコス）が區民名簿を管理した。個々の「家」（オイコス）の成員は、歸屬「區」の區民名簿に登録されて初めて、アテーナイ市民として公認されたのである。前451/0年の市民權法（*Arist.Pol.Athe.26.4*, *Plut.Per. 37*）によつて、ペリクレスは市民團の特權と閉鎖性を高めるために、子供への市民權の附與を、両親が共に市民權を持つ場合にのみ限定した。一方、各「區」は舊部族に代はつて、固有の集會、官吏、財産、儀禮、神官職等を保持した。しかし、舊部族と世襲貴族は行政上は無意味、無力と化した。宗教儀禮上は神官職のほぼ獨占を通して、依然として限定的に機能し續けた。（*Arist.Pol.Athe.21.2*～5）なほ、實際の「區」數は、アリストテレースの證言以外の他の文獻から知られる、行政單位でない集落まで數へた170か174（*Strab.IX,9.16*）や、碑文から知られる139（前307/6年、*J.S.Trail, The Political Organization of Attica, Hesperia Suppl.XIV*（1975）,pp.76,97）が傳へられてゐる。（アリストテレース／村川訳『アテーナイ人の国制』、175～6頁、訳註(6)、178～9頁、訳註(14)、参照。）

- (2)エピクロスの遠祖とされるフィライオスはトロイア戦争のアカイア方で、勇將の英雄アイアース（テラモーンの子）の子エウリュサケスの息子。英雄アイアースは義人アイアコスの孫として、アキレウスとともにアイアキダイ（アイアコスの裔）に屬し、アキレウスに次ぐ勇將と謳はれ、アイギナ人の一團を率いて入殖して以來のサラミス島の元領主で、豪傑ヘーラクレースと實懇の仲。（カール・ケレーニイ／植田兼義訳

『ギリシアの神話 英雄の時代』、中公文庫、昭和六十年、408頁以下、参照。) Plut.*Solon*.10の異傳によれば、フィライオスは英雄アイアースの子にして、エウリュサケスの兄弟であるが、ともあれフィライオスは同島をアテーナイに譲渡したことで、初めてその市民権を得て、前6～5世紀前半に新興貴族となり、赫々たる名家名門とはいへぬものの、後にアテーナイの富裕な貴賓の列に聯なる家祖となつた。(Hdt.6.35, Paus.1.35.2, Cf. J.Kirchner, *Prosopographia Attica*, 2Bde., Berlin, 1901-1903, 4855, P.MacKendrick, *The Athenian Aristocracy 399 to 31 BC*, Cambridge, Massachusetts, 1969, pp.3, 29, 36, 38, 41, 103, RE, art. 《Philaidai》 col.2121) この氏族フィライダイ(フィライオス家の末裔)は、「お馬鹿の」ミルティアデース、「雅量の人」キモーン、トゥキュディデース、アルキビアデースなどを輩出すると同時に、クレステネスの改革以後、新「區」の名稱の一つに採用された。僭主ペイシストラトスは、このフィライダイ區に原籍(本籍)があつた。

問題は、註1(3)や2(2)とも關はるが、民主政下で劃然と公私が分離したため相互の意義が明確になり、市民生活が私的領域に矮小化された「諸條件の平等」の下、市民の僅かな差異が個人性として偏重されるヘレニズム時代に、なぜ時代錯誤的にエピクロスについて半神としての英雄の遠祖や貴族の由緒ある系譜、家門について語られるかである。確かにディオゲネス・ラエルティオスが流行の評傳の書き方を採用しただけとも考へられるが、しかしそれ以上にエピクロスには「雅量の人」キモーンに見られるやうな、英雄の行動の個人性と貴族の「氣前のよさ」といふ父祖傳來の傳統的エートスへの選擇的な回歸とその内面化のあつたことが示されてゐるのではないか。マラ톤の戦の勇士でケルソネスの僭主ミルティアデースを父とするキモーンは、「民主政の雄」ペリクレスの及ばない財力を背景に、個人の不平等を自明として互酬性と賓客・友好關係を中核とするホメーロスの社會、あるいは前古典的社會の「私的な」生活規範・倫理を實踐した。一方、キモーンへの對抗上ペリクレス

は身の安全を圖りつつ「大衆に取り入つて」公私の厳格な分離を伴ふ民主政を推進するに當り、ポリスの公的領域、政治的空間に「私的な」人間関係が入り込むことを極度に警戒したといふ。(Plut. *Peric.*7、桜井万里子「『雅量』の人・キモン」、『古代ギリシア社会史研究』岩波書店、1996年、所収)

- (3)メートロドーロス(前331/30年-278/7年)はラムプサコスの人。エピクロス<sup>1</sup>の最古參の弟子で、同派の旗揚げに貢献した、エピクロス自身とメートロドーロス、ポリュアイノス、ヘルマルコスの所謂「四天王(καθηγεμμόνες)」の一人。師エピクロスに先立つ七年前に他界したことが知られる。イドメネウス(前325年頃-前270年頃)の同郷の義兄。メートロドーロスの妹バティスが嫁いだのである。詳細はD.L.x.22-24、參照。Vgl. Usener, *Epicurea*, S.412-413.

メートロドーロスの著書“Περὶ εὐγενείας”は『高貴な生まれについて』と譯するのが一般で、N.W.DeWittは、當時のアテナイでは殖民市(娘市)出身者はそれだけで蔑視されたので、それに對抗してエピクロスを擁護するために、エピクロスの名家名門の末裔といふ「高貴な生まれ」が持ち出されたとしてゐる。(N.W.DeWitt, *Epicurus and his Philosophy*, University of Minnesota, 1954, p.41)しかし、英譯nobilityを「義侠心」と讀んではどうか。理由の一つは註2(3)にあるやうに、「守護の柱石、助勢、助つ人」といふエピクロスの名前の意味との關はり、もう一つはディオゲネス・ラエルティオス自身が“εὐγένεια”の意味を四種に分けて解説してゐることによる。(D.L.iii.88-89.)すなはち、優れた先祖の子孫、権力者・支配者の子孫、有名人の子孫、そして「最高のもの」として、「心が高邁で雅量のある人(γεννάδας τὴν ψυχὴν καὶ μεγαλόψυχος)」が擧られてゐる。クレイステネスの改革が政治改革であると同時に、世襲貴族を全廢した社會改革でもあつた以上、ヘレニズム時代に、虚實取り混ぜ、貴族に聯なるエピクロスの由緒ある血統の系譜を腹心の高弟が

述作したのは、かうした系譜を背景としたエピクロス個人の「義侠心」を語るためではなかつたか。殖民市（娘市）出身者を見下す社会風潮への対抗や単なる貴族趣味やアナクロニズムではなかつたやうに思はれる。Cf. C.W.Chilton, *Diogenes of Oenoanda :The Fragments*, Oxford U.P., 1971, p.18, Fr.43, pp.100f. 註1(2)、参照。

子にとって意味を持つ血筋は、父親か祖父まで遡るのがせいぜいであった「個人主義」の時代に、家系、出生、青少年時代、壮年の事績、死の順序で語られる、詩人、哲学者、國王たちの生涯を対象とする諸種の偉人傳はエピクロス傳をも含めて、確かにかなり流布してゐた。ヘレニズム時代の傳記には、自傳的なものや回顧録の類を除けば、編年體で個人の事績を綴る「ブルータルコス型」と、個人の性格や事績を種類別に記述する「ステトニウス型」の別があると同時に、鳥瞰的な政治史書とは異なる、虫瞰的な特徴、つまり細部の事実の詰め、博識尊重、上品なゴシップ趣味といった、巷間の耳目をそばだてる傾向が濃厚にあつた。必ずしも傳記に直結したわけではないが、論争や個人攻撃の目的で他の哲學諸派の評価や逸話蒐集に耽溺した、アリストテレース以来のペリパトス（逍遙）派の影響の下、前五世紀までの文學・哲學上の獨創的な創意工夫より、対象の分析と典據の穿鑿や、文獻學、歴史研究の席卷といつた、前4世紀の知的状況と知的生活の激變が生じた。その激變の成果は、後の前3世紀に「第二のアテナイ」を目指した「哲學都市」アレクサンドレイアの餐舎と圖書館に集成された。この餐舎と圖書館は、マケドニアの覇權の支配下、アリストテレースと同じく市民權を持たないその高弟テオフラストスのために、テオフラストスの高弟にしてアテナイの執政デメトリオス・ファレロンが庭園を購入して建てた、アカデーメイア學園から獨立した、國家公認の學園組織に範を取つてゐる。ともあれ、かうして人々は例へば「王と政治家の内部に、王であること政治家であることに解消し切れない人間的なものを……発見し知ることができた」のである。（A・モミリアーノ／柳沼重剛訳『伝記文学の誕

生』、東海大学出版会、1982年、40、140、173頁、参照。)

- (4)カラティスあるいはアレクサンドレイアの人ヘラークレイデース・レムボス（レムボスは「快速艇」といふ渾名）は、（19世紀に数多のパピルス稿本が発見された上部エジプトの地）オクシリニコスの官吏で、前170頃、プトレマイオス六世下のアレクサンドレイアに在住し、アリストテレスの『政治學』抜粹を含め、蒐集した多数の文獻をもとに各種の要約、摘録を中心とする著作を残した。『ソーティオーンの（『哲學者たちの系譜（ $\Delta\iota\alpha\delta\omicron\chi\eta\tau\acute{\omega}\nu\phi\iota\lambda\omicron\sigma\acute{o}\phi\omega\nu$ ）』全13卷）摘録』もその一つ。ティモーンの諷刺詩（ $\Sigma\acute{\iota}\lambda\lambda\omicron\iota$ ）を論じた一書もある。後註3(1)、参照。一方、そのソーティオンは、やはりアレクサンドレイアの人で、前200~170年頃(?)に在世の、アリストテレスの弟子たるペリパトス（逍遙）派の著作家。ペリパトス（逍遙）派の仕事の一般的傾向については、前註1(3)、参照。ところで、このソーティオンと、D.L.x4にある『反（マグネシアの）ディオクレイオス論（ $\Delta\iota\omicron\kappa\lambda\epsilon\acute{\iota}\omega\nu\acute{\epsilon}\lambda\acute{\epsilon}\gamma\chi\omega\nu$ ）』の著者ソーティオン（14-37年?）は同一人物ではないらしい。後者のソーティオンはやはりペリパトス（逍遙）派であつたかもしれないが、マグネシアのディオクレイオスをエピクロス派とみなして論難し、エピクロスについても讒言を書き聯ねたと推測される。註4(3)、参照。

ディオゲネス・ラエルティオスの本『哲學者列傳』全10卷自體が、時代を先導するペリパトス（逍遙）派の知的轉換と關心、手法の下にあつて、ソーティオーンの『哲學者たちの系譜』（全13卷）と、同じくペリパトス（逍遙）派のサチュロスの『傑物傳』、そしてマグネシアのディオクレイオスの『哲學者便覧（ $\text{Ἐπιδρομὴ τῶν φιλοσόφων}$ ）』に、その材料の多くを仰いでゐると言はれる。特にそのソーティオンとサチュロスを抜粹したヘラークレイデース・レムボスの著書を、ディオゲネス・ラエルティオスは重寶したらしい。ディオゲネス・ラエルティオスは本書（D.L.）ii.113 から x.1 に至るまで、都合16

回言及してゐる。なほ、サチュロスは、前3世紀頃、やはりオクスリニコスとアレクサンドレイアで活躍した傳記作家。その『傑物傳』は、フィリッポスⅡ世、ソフォクレース、デーモステネース、ピュータゴラーズ等を扱ふ、無ジャンル物で、哲學者に限定せず、有名人の家系・係累や個性を露はにする逸話の集積で構成されてゐたといふ。一方、ディオクレイオスの『哲學者便覧』については、「エピクロスの学説全体を、彼（ディオゲネス・ラエルティオス）はディオクレスから持ってきた」とニーチェは誇張して述べてゐる。（ニーチェ／泉治典訳「マグネシアのディオクレス」、『古典ギリシアの精神』、ニーチェ全集1、ちくま学芸文庫、1994年、162頁。）

- (5)ポリス内の政治抗争や、クレロス所有といふ土地制度に起因する人口過剰を主な原因として、それに商業上の利害が結びついて、農地の獲得を大目的にポリス外に農業殖民市の建設が進められた。先住民の土地を奪ひ母市から獨立した新ポリスを建設する略奪型が古拙期・古典期には一般的だつたが、なかには入殖者が母市の市民権を保持したまま、あるいは娘市ポリスの市民権を附與された屯田兵として軍事入殖する、「クレルーキア（κληρουχίαクレロス占取）」の場合があつた。前366/5年アテナイの將軍ティーモテオスがサモス島を占領して以來、前352/51年に「二千名が送られた」（Strab. 1.14.18）といふ、エピクロスの父ネオクレースの入殖の場合がこれに当たる。ヘレニズム時代のポリス間ではこの二重市民権（ισοπολιτεία）が増加し、前1世紀にはコスモポリタニズムの誕生を促すやうに、複数の市民権をもつ個人や市民團が相互に出現するまでになり、舊來の割據するポリスの閉鎖性が變質し緩和されるに至つた。V.Ehrenberg, *The Greek State*, 2nd ed., Methuen, London, 1969, pp.106ff. 太田秀通『東地中海世界』、岩波書店、1978年、100頁以下、288頁以下、参照。
- (6)本文の前後の文脈から明らかなやうに、前323-22年は全ポリス世界の運命の分岐點となる、三人物が死んだ年である。當時の政治世界の覇者、

文化世界の統一者マケドニア王アレクサンドロスの病歿（323年）、その師傅にしてペリパトス派の領袖、また「萬學の祖」アリストテレスの病歿（322年）、そしてそのアレクサンドロスの父王フィリッポスⅡ世の強慾な覇權主義に抗して全希臘世界の糾合と獨立を擁護した最後の辯論家デモステネスの自裁（322年）。かうした激變する状況下で、Strab.l. 14.18によると、エピクロスはこのサモス島とテオスで育ち、アテーナイで二年の兵役に服したが、その時の同僚に後の喜劇作家メナンドロスがゐたとのことである。テオスはエピクロスが師事したとされる原子論者ナウシファネースの居住地。D.L.x.14、参照。なほ、重装歩兵の兵役には國境地帯の要塞の護り、占有した國外都市への駐屯、軍船での服務などがあり、馬を購ふ資力のある者は華形の騎士となつた。ただしアテーナイの慣行として、二十歳以下の者には實戰に關する兵役が課せられなかつたので、エピクロスもまた實戰配備はされなかつたであらう。

(7)Diod.Sic.xviii.18.9 に史録がある。註1(5)、参照。ペルディッカスが、前366/5年以來のアテーナイ人によるサモス島の軍事（屯田兵）入殖占領を解放して、43年ぶりに亡命サモス人たちの歸島を許したといふのである。

2(1)Cf. D.L.x.15. このサモス島直近の大陸部なるコロフォーン、續いてレスボス島のミュティレーネー、黒海近傍の（アテーナイを追われたアナクサゴラスが一派をなして歿した）ラムプサコスでエピクロスは私塾を營んで「弟子」（μαθητήs）を取つたやうである。この後、エピクロスは弟子たちを帶同してアテーナイへと出府した。註2(2)、参照。當時、良質の葡萄酒の産地で知られたラムプサコスの人メートロドロスはその最古參。なほ、ディオゲネス・ラエルティオスはエピクロスの小アジア時代の「弟子（μαθητήs）」(D.L.x.2) と、希臘世界各地に遍在してゐた「知音（φίλος）」(D.L.x.16)、その中「庭園」に集つた「社中（γνώρισιμος）」(D.L.x.12) を用語上區別してゐる。

(2)μέχρι μὲν τίνος κατ' ἐπιμίξιάν τοῦs ἄλλοις φιλοσοφεῖν 「そこで、(市民權をもつエピクロス

は外人ではなかったので、) 暫く弟子たちと心を一つに力を合はせて心術の究明に勤しみ」。一般には「ある時期までは、他の人たちと共同で哲学の研究をしていた」(加来彰俊譯)のやうに譯されてゐる。M.I.Parenteも同様に伊譯するが、それは以下に述べるやうに、アナクシクラテスがアルコーン(筆頭執政官)だった前307-06年の一年間、スニオンのソフォクレースの提案で、外人による哲學舎主宰の全面禁止が民會で決議されたため、エピクロスは他學派に身を寄せざるをえなかつたからだといふ。(Opere di Epicuro, p.97, n.2)しかし、「κατ' ἐπιμειξίαν τοῖς ἄλλοις」を「(帶同してきた)弟子たちと共同で」讀むことはできないか。このοἱ ἄλλοιは従來の讀み方では、アカデメイア派やペリパトス派、ストーア派等、エピクロスが身を寄せざるをえなかつた他學派と解されるが、むしろ後にエピクロス自身とともに「四天王(καθηγεμόνες)」と呼ばれた弟子たち(メートロドロロス、ポリュアイノス、ヘルマルコス)を指すのではないか。エピクロスは市民權があつたのだから、他學派に身を寄せる必要はなかつたはずである。當初「暫く」も、たとえ未組織であっても、國禁の「哲學」結社が作られたわけではなく、D.L.x.15には「(エピクロスは)ミュティレーネーとラムプサコスで足掛け五年をかけて所説を固めた」とあるので、アテーナイに移住の後、三天王とともに固めた所説にさらに磨きかけたといふことではないか。註2(3)、參照。

Usenerの補訂 ἀπο〈φαινεσθαί〉を讀み、Kochalskyの ἀποστρατεῖνを讀まない。

エピクロスが「三天王」の盡力を得て「エピクロス派」と呼ばれる一統をアテーナイで旗揚げした時期は正確には知られないが、前307/6年以降のこと。前307年、マケドニアの「攻城者」デーメートリオス・ポリオルケテースが、アテーナイに前317年以來續いた「管理者」ファレーロンのデーメートリオスの寡頭政支配を覆して、民主政を復活させた。おのづと舊來のリュケイオン學苑やアカデメイア學苑に對する反發が生

まれ、同年（307年）スニオンのソフォクレースの提案で、政務審議會と民會の承認によらなければ、外人による哲學舎の主宰が全面的に禁止（違反者は死刑）され、翌年（306年）には特にペリパトス派を標的として外人哲學者の國外追放が決議された。テオフラストスもリュケイオンから追放された。しかし同年、早くもその提案と決議は違法であるとして撤回され、外人哲學者たちもアテーナイに歸還した。しかし、アテーナイの市民権を保持してゐたエピクロスが「庭園」を設立するうえで、國法上の支障はまったくなかった以上、偶然前3307/6年以降に、磨きをかけて確立し熟した心術を以て「エピクロス派」が旗揚げされたと見るべきではないか。（D.L.v.38, Athe.13.610f., P.Green, *Alexander to Actium*, U.of California Press, 1990, pp.49, 61）

なぜ、諸派が多数あるなかで、「エピクロス派」だけが棟梁エピクロスの名を冠して呼ばれたのか。

かつて人名には、人間を呪縛する魔力が備はつてゐると廣く信じられ、人名が人間のありやうに深く關はると觀念されてゐた。「人の姓名は、……人間自體を傷つけないでは引搔いたり、剥いだりはできぬ皮膚そのもののやうにすつかり、人間にくっついて離れないもの」（ゲーテ/小牧健夫訳『詩と真実』第二部、岩波文庫、昭和四九年、二四九頁。）さうである以上、個人の個人性は命名と同時に誕生し、「出家」時の聖名の附與を典型として、改名は人間の根本的變成の條件だつた。従つて、名前がその持ち主のありやうに適合せず、齟齬、違背してゐれば、それは正しい名前ではなかつた。古代ギリシアにあつても、それが單なる諧謔でないことについては、Plat.*Phaed.*59B、Eur.*Iph Tau.*500、參照。

ところで、ギリシア人の名前には姓がなく、男子の名は通常、祖父との同名が多く、父子同名も少なからずあつた。前508年の、かのペリクレスの大伯父クレステネスによる國制改革（新10部族制）以前の貴族政時代では、姓に代用した家長たる父親の名の扱ひは重要で、アテーナイでは、男子の名は父親のそれを附して、例へば「オロルスの息子ツキ

ユディアス]、「デモステネスの息子デモステネス」などと呼ばれた。公式には、それに氏族名を聯ねて呼んだやうである。(F・クーランジュ／田辺貞之助訳『古代都市』、白水社、1978年、164-165頁。)しかし、政治的權威を誇る所有階級たる世襲貴族政の息の根を止めた同改革以降は、「ゲノス」(氏族)が制度上、廢されて、その氏族に似せた「デモス」(區)が採用された結果、原籍の歸屬する「區」名を姓の代わりとして、人名は主として、例へば「アロペケ區のソクラテス」、「ガルゲーツス區のエピクロス」などと呼ばれ、職業や肩書を銘記することもなかつた。(Arist.Pol.Athe.21.4) アッティカの古い貴族の後裔ペリクレスですら「軍務官ペリクレス」でなく、ただ民衆派の領袖「クサンティッポスの息子ペリクレス」と呼ばれたものである。しかし、公式の扱ひでは、依然として父親の名も使はれたといふ。(Arist.Pol.Athe.63.4) すなはち、民主政下にあつては、「ギリシア人の名前は個人的であり、個人そのものを示し、個人と不可分である。……要するに、称号も職名もつけず、個人の名のみを名乗るといふことは、ギリシア独特のことといつてよいだろう。……このような人間は、社会的裝飾物を必要とせず、ただ一族の背景をわずかに暗示しさえすればよかつた。すなわち、ギリシアでは、人間は、純粹人間が所有する單純率直さを誇りとして世にあらわれたのである。」(リヒアルト・ハルダー／松本仁助訳『ギリシアの文化』、北斗出版、1991年、13-15頁。)

しかも、大抵のギリシア人の個人名は、男女を問はず、それと分かる意味の語根を借用してゐるため、名前には特有の聯想が働いたと思はれる。例へば、ソフォクレスは「知の譽れ」、アリストファネスは「最善のものを誇示する人」のやうに。従つて、エピクロス(Ἐπίκουρος)の場合は、「百人力、千人力」の聯想が働いたはずである。動詞 ἐπικουρέωや名詞 ἐπικουρία、形容詞 ἐπίκουροςから判然とするやうに、「(戦争や窮境時の、また敵對者がゐる際の) 守護の柱石、助勢、助つ人」が聯想されるからである。因みに、οἱ

ἑπίκουροιと言へば、通常はポリス国防上の「傭兵」や「援軍」、國軍に加勢する「同盟軍」を指す。Plat.Rep.414b, 415a, 545d「守護者」、Hdt.1. 64, 6.39「僭主の護衛」等の用例があり、アテーナイ重装歩兵の教練隊長だつた人がエピクロスと同名異人といふのは、できすぎの観がある。(D.L.x.26) 一方、その記述の正確さに疑問なしとしないが、Pausa.8.30.4, 8.38.8, 8.40.7~9には、「除病加護のアポロン」(Ἄπολλων Ἐπίκουριος。飯尾都人氏の譯語)と命名され、アポロンの「加護による癒し」を願う神殿が存在する。ペリクレースの同時代人で、ピガリアの神殿建築の棟梁イクティノスによつて、アルカディアの深山バツサイの地に建立されたもの。ペロポンネソス戦争初期に、イクティノス自身の滞在中にアテーナイを襲つた悪疫の平癒祈願との関わりがあると言ふ。(M.Robertson, *A History of Greek Art*, vol.1, Cambridge U.P., p.356, 1975, J.J.Pollitt, *Art and Experience in Classical Greece*, Cambridge U.P., p.126, 1972) 註1(2)、参照。

珍しくもなぜか、類例のない創始者の名を冠して呼ばれたエピクロス派(Ἐπίκουρειος)は、それゆゑ「助勢、助つ人」集團の性格が聯想され刻印される一方、その守護の柱石たるエピクロスを、同派は「神」と呼び慣はした。幾度もエピクロスを「まさに神(deus)」、「神のごとき」(Luc.5.1-51)と呼んだルクレティウスがその典型である。確かにエピクロスも死を免れなかつたにせよ(Ibid.3.1042)、その超人的な才知と心術が無知と悲慘の極致にある人間たちを救ひ癒し、静穏な淨福に憩う「神々に相應しい生活」(Ibid.3.322)を可能にしたからだといふのである。ローマの主神「天なる父」、「助けの父」ユピテルJuppiterは、そのラテン語の屬格形Jovisが「助ける(juvo)」を聯想させたからであらう。實際、『母親宛書翰』(Arrighetti, *Epicuro:Opere*, p.439. cf. Chilton, *Diogenes of Oenoanda :The Fragments*, p.20, Fr.52)の一節で、神ならぬ死すべき己れの宿命を甘受しつつも「神に等しい自分の生活」を営んでると現況を報告したエピクロス自身が、『メノイケウス宛書

翰】(Ed.ad.Men.135)で、心術の體得によつて「御身は・・神(θεός)のごとくに生きるだらう」と、知音たちに完全な心の靜謐への到達を保障してゐる。

- (3) αἴρεσιν συστήσαντα 「社中を旗揚げした。」社中は結社そのものを指す場合と、結社の仲間を指す兩義があつて、ここは前者。後者の社中には γνωρισμός (D.L.x.12) の語が使はれてゐる。σχολήは「學校」と直譯されて、「庭園學派」と解されるのが一般であるが、むしろディオゲネス・ラエルティオスは αἴρεσις 「社中」と σχολή 「所説」を書き分けてゐるやうに思はれる。例へば、D.L.x.15 ἐν Μυτιλήνῃ καὶ Λαμψάκῃ συστήσασθαι σχολὴν ἐπὶ ἕτη πέντε 「ミュティレーネーとラムプサコスで足掛け五年をかけて所説を固めた」、τὴν τε σχολὴν διαδέξασθαι Ἐρμαρχον 「エピクロスの所説を棟梁として引き継いだのがヘルマルコス」。一方、A.Laksは「弟子の養成」(σχολή)と「學派の樹立」(αἴρεσις)を區別して、σχολήを「未組織状態の學塾」とも解してゐる。Cf. A.Laks 'Édition critique et commentée de la Vie d'Épicure dans Diogène Laërce (X,1-34)', p.36

- (4) エピクロスが心術の究明に着手したのは、D.L.x.14 と Sud. <Ἐπίκορο-υρος> col.2404 では「12歳」で、史料上の齟齬がある。「14歳」だとすれば、初等教育を終へる頃から、「12歳」だとすれば、初等教育の最中からといふことになる。

徒弟制の職業教育を除けば、一般に男子は7歳になると、「パイダゴース(養育係 παιδαγωγός)」といふ信頼され教養のある家僕世話や付き添ひの下、競技場や手習所に通つて、初等の文學、體育、音樂を14, 15歳まで教育された。謝金(束脩)は安かつた。公立の塾はなかつたが、ソローン以降、この「読み書き算盤音樂體育」の中身はポリスの厳格な管理の下に置かれ、「民族の百科事典」ホメーロスとヘー

シオドスの叙事詩が定番の教科書で、抒情詩、讃歌、悲・喜劇なども暗誦された。特に詩と音楽は密接に關聯し、抒情詩人は音楽家だったので、抒情詩の大半は豎琴を奏でる音楽とともに暗誦されたのである。初等教育が完了すると、男子は普通は實生活に入るが、國事への抱負のある富裕な者はさらに辯論術や哲學の教養を積んだ。主としてさうした技術を高額の謝金を取つて教へたのが遍歴のソフィスト(知慧者)たちだった。

(5)アッポロドーロスは前2世紀後半の人。社中の直接エピクロスを知らない棟梁で、「静塾園の第一人者(ὁ κηποτύραννος)」と呼ばれた、エピクロスを凌ぐ四百卷の著作を残した多作の人。(エピクロスにはほぼ三百卷の述作がある。D.L.x.26) このὁ κηποτύραννοςは「庭園の獨裁者」と直譯すべきではなく、現代風に言へば「ミスター静塾園」ほどの意味かと思はれる。M.I.Parenteは“signore del giardino”と伊譯してゐる。(Opere di Epicuro,p.98,n.1) Usener, *Epicurea*, S.400-401.ディオゲネス・ラエルティオスはこのアッポロドーロスを重用して頻繁に引用してゐる。Cf.D.L.x.2,10,13,25.本巻以外にも、カルネアデースを引用した本巻D.L.x.26と同内容のD.L.vii.180にその引用があり、エピクロスと多作を競ひ、七百五卷以上の巻本をものしたクリューシッポスが言及されてゐる。ただD.L.i.58,60の言及は、同名異人が多いことから、このアッポロドーロスかどうかは判然としない。

(6)Cf. Sext. *Emp. adv. Math. ix.* (= *adv. Dogma. iii*) 8, x. (= *adv. Dogma. vi*) 11, 18-19. Hesiod. *Theog.* 116f. セクストス・エムペリコスの語る事情はディオゲネス・ラエルティオスのそれより少し詳しい。それによると、萬物の始源を問ふた(14歳の?あるいは12歳の?)エピクロスは、それがヘーシオドス『神統譜』の語る「カオス」(χάος、隙間、割れ目)ならば、その「カオス」の成立根據は何かとさらに究極を問ふたが、手習ひ稽古所の師匠たちは答へられなかつたのだといふ。そしてそれを機に答へを求めてエピクロスは「哲學」に邁進したとしてゐる。本文の文脈からすると、その「哲學」がデーモクリトスの(原子論)心學であり、

そしてそれによつてヘーシオドスの神話的思考から離れたといふことか。この「カオス」の成立根拠を問ふたといふ、少年エピクロスの關心のありやうが、ディオゲネス・ラエルティオスの語らない記事である。「カオス」はイオーニア宇宙論で萬物の始源の領野と觀念されてゐるので、少年エピクロスはサモス島時代にさらにその「カオス」といふ成立根拠の成立根拠を問ふたといふのである。

ディオゲネス・ラエルティオスは D.L.x.12 で、エピクロスの私淑した古哲としてアナクサゴラスと（アナクサゴラス門下で、ソークラテースの師匠）アルケラオスを挙げ、D.L.x.13 で、エピクロスとレウキッポス、その弟子デーモクリトスの關係について言及してゐるが、僅かな記事にすぎない。一方、プルータルコスは『コロテス論駁』（Plut.ad.Col.1108E）で、デーモクリトスがエピクロスから多額の謝金（授業料）を取つたなどといふ時代錯誤の記事を載せながら、エピクロスがデーモクリトス信奉者であつたことを、痛烈な皮肉混じりに語つてゐる。

なほ、「カオス」（ $\chi\acute{\alpha}\omicron\sigma$ ）は所謂「混沌」や「得體の知れないどろどろ」を表すわけでない。隙間や割れ目、鳥飛ぶ大空、冥界の深淵の意があり、 $\chi\acute{\alpha}\sigma\mu\alpha$ 「大きく空いた口、裂け目」、 $\chi\acute{\alpha}\sigma\mu\eta$ 「欠伸」、 $\chi\acute{\alpha}\sigma\kappa\omega$ （ $\chi\alpha\acute{\iota}\nu\omega$ ）「欠伸をする」に通じ、語根  $\chi\alpha-$ は「カハーと口をあけてゐること」を表すらしい。河野與一はヘーシオドスの「カオス」の件を、「始めにあくび出たり」と譯してみせた。（河野與一『學問の曲がり角』、岩波書店、昭和三十三年、七頁。）

(7)ヘルミッポスは小アジアはヘルムス川の河口シュミルナ出身の前3世紀の人。著名人を扱つたペリパトス派の傳記作家で、文獻學者詩人カリマコスの弟子。プルータルコス英雄傳にその手法が踏襲された。正確な史實よりも扇情性を重んじ、特に人の終焉の様に關心を寄せたといふ。ディオゲネス・ラエルティオスは D.L.x.15 で、エピクロスの終焉をヘルミッポスに據つて語つてゐる。

(8)  $\gamma\rho\alpha\mu\mu\alpha\tau\omicron\delta\iota\delta\acute{\alpha}\sigma\kappa\alpha\lambda\omicron\sigma$  「(読み書き算盤音樂の) 手習所

の教生」。一方、D.L.x.4σὺν τῷ πατρὶ γραμματα διδάσκειν 「(恐らくコロフォーン時代からエピクロスは) 親父の片腕として読み書き音楽を教へる手習所を営んだ」。これは意圖的な讒言で實態を歪曲されてゐるといふのが、ディオゲネス・ラエルティオスの書き方である。推測すれば、それが12歳あるいは14歳で「哲學」を志したエピクロスのミュティレネやラムプサコスでの離伏の、そして一統の師弟関係が作られた時代に繋がる生業だとすれば、青年相手に「哲學」文書の「講釋」のやうなものをしたことを指すのではないか。エピクロスがデーモクリトスの巻本に出會つたといふのもこの時代であらう。エピクロスはソフィストのやうな遍歴の流れ者としてでなく、自らも修業しつつ個々の地に暫時定住して教へたのではないか。

なほ、註3(2)のやうにエピクロスの父親も γραμματο διδάσκαλος (読み書き算盤音楽の教師) だつたと解するのが一般であるが、さうだとすると、D.L.x.2 に少年エピクロスがわざわざ他人の αἰ γραμματίσται (手習所の師匠聯中) に仕込まれたとあるのは奇妙だと言はねばならない。なぜ父親に教はらなかつたか。註2(4)、参照。

3(1)フリウースのティモーン (前320-230年頃) は懷疑派ピュローンの弟子。貧しい青年時代に踊りで生計をたて、メガラ派や懷疑派の修養を積みソフィストとして活動した後、アテーナイに移り住んだ。六脚韻もどきの諷刺詩 (Σίλλοι) で、他派の哲學者たちを嘲笑するのを得意としたといふ。アテーナイに「庭園」を構へてからのエピクロスもその對象にされたわけである。

(2) γραμμα διδάσκαλίδησ 「手習ひ稽古の教生風情」。註2(8)、3(1)、参照。N.W.DeWittはこの奇抜な蔑稱を“Elementaryschool-teacherson” (*Epicurus and his Philosophy*, p.40) と奇抜な一語に譯し、R.D.Hicksは“a schoolmaster like his father before him” と解し、“the schoolmaster’son” (*Diogenes Laertius II*, Loeb Classical Library, 1979,

pp.530f) と英譯してゐる。また、E.Bignoneはこの語がもともと蔑稱ではない“d'un maestrucchio figliuolo”の意であるにもかかわらず、強いて蔑稱として使はれたと解してゐる。(Epicuro, Roma, 1964, p.194) C.BailyはこのBignoneの伊譯の讀みを採用して、古喜劇に特有の造語法による“teacher of infants”の意で“infant schoolteacher”と英譯した。(Epicurus: The Extant Remains, p.141,403. G.Arrighetti, Epicuro: Opere, p.486) M.I.Parenteは“mastrucolo di scuola”と伊譯してゐる。(Opere di Epicuro, p.98) A.Kochalskyは“(er) Dorten Die Kinder gelehrte” (Das Leben und die Lehre Epikurs, Teubner, Leipzig u.Berlin, 1914, S.1) と獨譯し、J.P.Fayeはただ“maître d'école”と佛譯してゐる。(Épicure, Herman, Paris, 1965, p.38) なほ、後續の一句  $\alpha\nu\alpha\gamma\omega\gamma\acute{o}\tau\alpha\tau\omicron\varsigma \xi\omega\acute{o}\nu\tau\omega\nu$  「その無知蒙昧は、比類を絶した天下の一品」には、飼ひ慣らされてゐない、人間以下の最下等の家畜といふ刺すやうな含蓄がある。

(3) Sud. 《Eπικουρος》 col.2404 によると、エピクロス自身も病弱だったが、その實の三兄弟はいづれも病歿したといふ。D.L.x.3 (心術の研鑽), 18 (墓前の手向け)、參照。

(4) フィロデーモス (前110年頃-40/35年頃) はガダラで生まれ、多分ヘルクラネウムの、カエサルの女婿でキケロに敵對した貴族ルーキウス・カルプルニウス・ピーソーの所謂「パピルス (別 莊) で死去した後期エピクロス派社中。ピーソーはエピクロスの信奉者で、この別莊に膨大な藏書と自著を残したフィロデーモスは友人としてピーソーを指南した。「エピクロス本人は、克己、自制、公正、つまり徳がなければ幸福は望めないと考えていたのだが、その学説の方は、ローマ帝政時代に及んで、ひどく粗雑なものになってしまっていた。その無数の弟子たち——たとえば哲学者のフィロデモスなど——は、エピクロスの説を作り変え、また発展させて、ぜいたくで愉快的な人生を讚美するするやうなものにした」(エゴン・カエザル・コンテ・コルティ／松谷健二訳『ポンペイ』、みす

ず書房、昭和39年、63頁。276頁も参照)。當然、キケロはこの後期エピクロス派のフィロデーモスを痛罵してゐる。Cic. in Pisonem. c 28.しかしV.Tsounaは、フィロデーモスによるエピクロス心術の特に美學と倫理學の「洗練と變容は注目と研究に價する」として、それ自體が哲學的に貴重な貢獻だと積極的に評價してゐる。(V. Tsouna, *The Ethics of Philodemus*, Oxford U. P., 2007, pp.1-2)

- (5) ミュローニアノスはアマストリス出身で、その生涯、作風、生歿年等が不明の、ディオゲネス・ラエルティオスの本書で6回言及の人。D.L.i. 115, iii.40, iv.8,14, v.36, x.3。註3(4)の貴族趣味のフィロデーモスとは違つて、哲學と奴隷のことに關心を寄せた人かもしれない。
- (6) デイオテモス (Διότιμος) はポセイドーニオスと同時代人で、前2世紀中葉の同ジストア派。ストア派が一體でエピクロスに悪意を持つた否かはわからないが、デイオテモスを含めてその相當数がエピクロスを誹謗中傷したらしいことがわかる。デイオテモスについてはさうしたこと以外には知られないが、Athena.xiii.611Bにあるマグネーシアの人デーメートリオスの『(詩人と作家の) 同人名録』の記事によると、テオティモス (Θεότιμος) といふ人と同一人物らしい。テオティモスはエピクロス論難の著作を何巻も書き、エピクロス派の論客ゼーノーンに論駁されたことが知られる (Crönert に従つて ἐξελεγχεῖς ἀνηυπέθηを讀み、ἐξαίτηθεῖς ἀνη(ι)πέθηを讀まない) といふ。Vgl. W.Crönert, *Kolotes und Menedemos*, Adolf M. Hakkert, Amsterdam, 1965, S.22, 175. このマグネーシアの人デーメートリオス (前50年頃在世) はキケロの親友アッティクスの友人で、ディオゲネス・ラエルティオスがD.L.i.38からx.13に至るまで都合24回依據してゐる、文献學者で編纂家。『(詩人と作家の) 同人名録』は同名異人の物書きを比較したもの。同名の都市を比較した著作もあつたといふ。

なほ、ディオゲネス・ラエルティオスが、エピクロスに對する嫉妬に

驅られた誹謗中傷者として列挙してゐる、このディオテモスからクリュシッポス、ポセイドーニオス、ニコラオス、ソーテオーン、ハリカルナッソスのディオニュシオスに至るまでの人物の系列には、慎重に「活動年代の順序が保持されている」と、ニーチェが指摘してゐる。(ニーチェ／泉治典訳「マグネシアのディオクレス」、『古典ギリシアの精神』、156頁。)

(7)古ストア派のクリュシッポス(前280年頃? - 前207年)の猥談狂ぶりはD.L.vii.187,188にも語られてゐる。著書『國制論』には、近親相姦の勧めまで書かれたといふ。

4(1)元々ポセイドーニオス(前135頃-前51/50頃)が隠然として語つてゐたエピクロスに對する反感や罵詈雑言を、その後その一派が公然と言擧げたといふのであらう。「古代世界最後の文學と學問の創造的天才」(M.Rostovzeff)ポセイドーニオスはキケロのストア主義に關する情報源だつたので、キケロのエピクロスに對する反感が醸成されても不思議はなかつた。

(2)ダマスコスのニコラオス(前64年頃~?)は名門の生まれで、ローマ帝國のユダヤ総督ヘーローデース王(新譯聖書 Matt.ii)子飼ひの宮廷史家。悲劇や喜劇に關心を寄せ、劇仕立ての筆法で自傳やローマ史の著作を公刊する一方で、ペリパトス派(殊にアリストテレース)の哲學と自然學に造詣があつた。同時に、初期の著作の語り口にはポセイドーニオスの影響も認められるといふ。註4(1)、參照。

(3) ἐν τῷ δωδεκάτῳ τῶν ἐπιγραφομένων Διοκλείων ἐλέγχων, ἃ ἐστὶ πρὸς τοῖς εἰκοσιτέσσαρα は多々補訂の試みが行われたが、ここでは Arrighetti の底本のテキストを読む。補訂の試みの詳細については、Baily, *Epicurus*, p.403, Laks 'Édition critique et commentée de la Vie d'Épicure dans Diogène Laërce (X,1-34)', pp.39f、參照。

この『反(マグネシアの)ディオクレイオス論(Διοκλείων ἐλέγχων)』の著者ソーテオーン(14-37年?)は、ヘラークレ

イデース・レムボスがその抜粋集を作つたとされる (D.L.x.1)、『哲學者たちの系譜 (Διαδοχὴ τῶν φιλοσόφων)』全13巻の著者と同名異人だとすれば、ローマ帝政時代はティベリウス帝治世下の人だつたらしい。ストア派セネカの師、あるいはペリパトス (逍遙) 派であつたかどうか。『哲學者便覧 (Ἐπιδρομὴ τῶν φιλοσόφων)』を書いたマグネシアのディオクレイオスをエピクロス派とみなして論難し、エピクロスについても讒言したと推測される。註1 (4)、参照。一方、論難されたマグネシアのディオクレイオスは、「エピクロスの見解を説明するにあたって……入念な努力を注ぎ……冷たい柱廊<sup>スト</sup>よりもエピクロスの小庭園の中での休息を望んでいた」とニーチェが書いてゐる。(ニーチェ/泉治典訳「マグネシアのディオクレス」、『古典ギリシアの精神』、161頁。)

(4)ハリカルナッソスのディオニュシオス (前25年頃在世?-前1世紀末) はアウグストス帝治世下にローマに在世の修辭家で、實證性より教訓を重んじた歴史家。なぜエピクロスを中傷したか、不明。ただAthena.xii.547Aによると、「ローマに快樂を持ち込んだ」咎で、前2世紀前半にエピクロス派のアルカイオス、ピリスコスなる人物が國外追放に處せられたのを、アテナイオスが讃えてゐるので、教訓史家ディオニュシオスにもエピクロスに對して同様の思ひがあつたのかも知れない。註3(4)、参照。

(5) σὺν τῇ μητρὶ περιιόντα αὐτὸν ἐστὰ οἰκίδια καθαρμῶν ἀναγινώσκειν, καὶ σὺν τῷ πατρὶ γράμματα διδάσκειν は本文のやうに譯した。一般には「(エピクロスは) 母親といっしょに家から家へと歩き回って、お祓いの文句を唱えていたし、また父親とともに読み書きを教えて」(加来彰俊譯) のやうに譯されてゐる。といふのも、この一句を讀むのに、雄辯家・政治家デーモステネース Demosth. de corona. 257-265 (258 ἄμα τῷ πατρὶ πρὸς τῷ διδασκαλείῳ προσεδρεύων) の、政敵アイスキネースを論難

する一節を文飾上の定型として参照するのが通例になつてゐるからである。この一節でアイスキネースは、貧しい手習所を營んだ父に仕へて掃除などをする一方、母を助けて外來の迷信宗教の役僧のやうな役回りも演じ、後には悲劇役者などをも経て雄辯家に成り上がった経歴が輕蔑されたのである。

エピクロスについて問題なのは  $\kappa\alpha\theta\alpha\rho\mu\acute{o}\upsilon\varsigma \ \acute{\alpha}\nu\alpha\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\epsilon\iota\nu$  を「お祓いの文句を唱え」と譯すかどうかである。拙譯ではデーモステネースからの聯想を考慮せず、 $\epsilon\acute{\iota}\varsigma \ \tau\grave{\alpha} \ \omicron\iota\kappa\acute{\iota}\delta\iota\alpha \ \kappa\alpha\theta\alpha\rho\mu\acute{o}\upsilon\varsigma$  を「兎小屋のやうな家を狙つた片づけや掃除」、 $\acute{\alpha}\nu\alpha\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\epsilon\iota\nu$  を「讀む（唱へる）」ではなく「押し賣り（説得）する」と解した。 $\kappa\alpha\theta\alpha\rho\mu\acute{o}\upsilon\varsigma \ \acute{\alpha}\nu\alpha\gamma\iota\nu\acute{\omega}\sigma\kappa\epsilon\iota\nu$  を「お祓いの文句を唱え」と讀む場合、初めに結論ありきで、數々の迷信を打破したエピクロスの心術の動機と起源をそこに求めずにもない牽強附會が生まれるが、無理があるやうに思はれる。その典型については DeWitt, *Epicurus and his Philosophy*, p.42、参照。Laksはこのこじつけを斥けながらも、「四大徳」（ $\tau\epsilon\tau\rho\alpha\phi\acute{\alpha}\rho\mu\alpha\kappa\eta$ 、【自律的な生き方を引き出す】鑰となる洞察（ $\text{Κύρια Δόξα}$ ）】の冒頭の4番までの神々、死、快、苦に對據する箴言。D.L.x.139, 140, *Pilodm. Herc.*1005. 4) を中心に、【鑰となる洞察】に盛られた術理の全體を、エピクロスが社中に口寫して拳拳服膺（暗誦）させる鍛鍊法（D.L.x.12-13, 16）はそれ自體、通俗的な迷信やその呪文に對抗しそれを排除する「淨めの逆呪文」として、母親の影響を残すとしてゐる。（A.Laks 'Édition critique et commentée de la *Vie d' Épicure* dans Diogène Laërce X, 1-34', p.41）しかし、Charletonは、物理上の決定論と人間の自由意志との調和を身上とするエピクロス主義の原體驗が、それが讒言であることを十分承知しながら、母親との呪文（魔術）の共有にあつたとしてゐる。（W.Charleton, trans. by F.Manning, *Epicurus' Morals*, Peter Davies, London, 1926, p.xxiii）

(6)レオンティオンは有能なエピクロス社中だつたのであらう。Alchiphro ii.2.4, Vgl.Usener, *Epicurea*, S.411

賣春は傭兵とともに人類最古の職業の二つと言はれるが、古代ギリシアでも賣春は当たり前前の生業として受け容れられてゐた。そしてその娼婦には高低の四階層があつた。デーモステネースやルーキアノス『遊女の對話 (Ἐτραπικὸὶ Διάλογοι)』で作品化され、Athena.xiii は全巻この賣春婦の問題を、誇張を交へながら紹介し論じてゐる。まずアテーナイと外港ペライウスにあつて、賢者ソローンがそれからの賣春税の取り立てを定めたといふ、(國營の) 賣春宿に圍はれた「女奴隷」。次に賣春宿の外の繁華街で客引きする、年増の落ちぶれた元ヘタイラが多數と言はれる「街娼」。その上の、笛吹き、踊り子、曲藝師といった「女藝人」。奴隷として賣買される場合もあり、稼ぎの不足を賣春で補つたもの。そして頂點が高級娼婦「ヘタイラ」(賣笑婦、賣春婦、傾城、花魁、太夫、遊女、白拍子等、邦譯は難しく様々で、實態は哲學や文學の教養も技倆も高い今で言ふ「女優」のやうなものともされるが、拙譯では「<sup>うたひめ</sup>絞妓」)。ヘタイラの一大中心地がコリントスだが、それ以外の地でもヘタイラが有名になつたのは當時の著名人、將軍や政治家、雄辯家、文人等の愛人として知られた事が大きい。傳說的ヘタイラにはクレブシュドラ(水時計の意)、ペルシア王クセルクセスにスパルタの情報を通じたミレトスの娼婦タルゲリア、ソフォクレースに仕へたテオリスとアルキッペ等がある。一方、有名なヘタイラにはアレクサンドロス王の情婦タイース、雄辯家アリスチップスの情婦ライース、將軍ペリクレースの内妻アスパシア等がある。讒言とは言へ、エピクロスと通じたとされるヘタイラについても、レオンティオンの他にマムマリオン、ヘーディア、エローティオン、ニキディオンの四人が擧られてゐる。Cf.D.L.x.7. 因みにアテーナイでは、イオーニア出身者が圧倒的に多かつたヘタイラといふ、他國女との婚姻を禁じる國法があつたので、ヘタイラはしばしば著名人の内妻におさまつた。D.L.x.23 ではエピクロス

の腹心で「四天王」の一人メートロドーロスがレオンティオンを落籍して内妻にしたと語られてゐる。Cf. H.Licht, *Sexual Life in Ancient Greece*, trans.by J.H.Freese, Routledge & Kegan Paul, London, pp.329ff. バーン&ボニー・ブロー／香川檀・家本清美・岩倉桂子訳『売春の社会史(上)』(「第三章ギリシア人」)、ちくま学芸文庫、1998年)、参照。

(7)初期イオーニア自然學では世界構成の始源、その生成と消滅の成立根拠が様々に問はれたが、ソクラテース・プラトーンは始源から一轉して哲學を天上から地上へ、そしてさらに「心(魂)」の問題の探求へと引き降ろしたと言はれる。デーモクリトスの原子説はなほ世界構成の始源の探求を便宜的に繼承しつつ、さうした哲學の主流たる「心問題」の系列にある心學と、相互の整合性は明らかではないが、抱き合はせて構想され、むしろ力點は心學に置かれたのではないか。エピクロスも心術に力點を置きつつ、デーモクリトスの原子説を繼承して編み直し(D.L.x.13, Lucre.5.622)、原子の「重さ( $\beta\acute{\alpha}\rho\omicron\varsigma$ , D.L.x. 54)、原子運動の「(最小限の)ゆらぎ(inclino, voluntas, climanen, Lucre.2.243-283)」(デーモクリトスやストア派の「必然性(運命の掟)」に對する「運命に左右されない力」、確信の成立根拠としての「知覺(感覺,  $\alpha\iota\sigma\theta\eta\sigma\iota\varsigma$ , D.L.x.31-32)」等を新たに構想したやうである。「レウキッポス・デモクリトスの原子論は、パルメニデス思想との対決の結果、その強引な居直りの産物として成った」(山川偉也『古代ギリシアの思想』講談社学術文庫、1993年、143頁)とすれば、デーモクリトスの原子は排中律によって世界の生成と消滅を全面否定するパルメニデスの「存在」を「もの」と了解したうえで、それを細かく碎いたものとして構想され、「必然的な」重さをもたない直進運動をするのみである。しかし、かうしたいはば古典力學に對して、不確定性原理といふ偶然性を導入した量子力學にも似たエピクロスの不分割素論がなぜ構想されえたのか、詳細は不明。

アリストIPP(キュレーネ派)の「快」の増殖を肯定する快樂説は、ディオゲネス・ラエルティオスが明快に指摘するやうに(D.L.x.

136-138)、「無苦」を最高の「快」とするエピクロスの快適説と大きく異なる。

- (8)市民権がなければ不動産の取得はできなかつた。市民権のあつたエピクロスはアテーナイ市域のメリテー區に家屋敷を所有し(D.L.x.17)、その他に市域外西北郊に「庭園」の地所を80ムナで購入したといふ(D.L.x.10)。この地所には附屬の建物も建てられたはずだから、全體の費用はさらに80ムナ以上に嵩んだであらうが、いずれも正式に登記されたものであることが、遺言書で確認できる。(D.L.x.16-17) 廣さは不明だが、いくら「田園好き」(D.L.x.120a)であつても、郊外の田園に土地を購入するのに80ムナは相當の大金だつたのではないか。「田園と言へば大部分が痩せ地かありふれた土地」(Plut.Sol.22、村川堅太郎譯)とある。どの程度の費用がかかつたものであらうか。

前403/02年後ほどなく一日1オボロスの民會手當の支給が始まり、物價の變動に應じて前391年以前に手當が一日3オボロスに(Arist.Ath.Pol.41.3, Aristph.Ecc.292)、そして前327年には6オボロスに改められた。(G.Busolt, *Griechische Staatskunde*, II, 2Bd, C.H.Beck, S.921) また、アレクサンドロス王の時代に傭兵の月給が30ドラクマ程であつたから、1ムナは100ドラクマとすると、「庭園」の地所購入費80ムナ=8000ドラクマは傭兵のほぼ22年分の給料の総額に當たる。

古代ギリシアの貨幣價値を現在の圓に換算するのは、難しいが、敢へてすれば、庶民の日雇ひの日給が2オボロス=1000円程、6オボロスが1ドラクマ=3000円程で、100ドラクマが1ムナ、1タラントン=60ムナだから、80ムナ=1.3タラントン=8000ドラクマは2400万円程となる。(因みに、アレクサンドロス王の主催した、遠征時に親友となつたインドの裸行者カラノスの死を悼む「生のままの酒を呑む競技」で、一等1タラントン(一千万円程)の賞金が懸けられたといふ。Plut.Alex.70.この換算でいふと、80ムナ=1.3タラントン=1330万円程となる。) なほ、プラトーンのアカデーメイアの小庭園は20(あるいは30)ムナで購入はれ

て、アテーナイ屈指の名門の出自でありながら意外に富裕でなかつたらしいプラトーンに「寄贈」されたものだといふ。(D.L.iii.20) エピクロス「庭園」の地所購入費80ムナがいかに大金であつたかが分かる。個人で負擔できたのかどうか。エピクロス派は権力者の庇護を受けたのか(註4(10)、参照)、あるいは特別な収入があつたのか。

なほ、讒言とは言へ、D.L.x.7でエピクロスは一日の食費に1ムナ(=20~30万円弱)を濫費したとされる。エピクロス個人ではなく、社中全體の一日の食費と見ても無理があり、麵包と水だけの贅を削いだ暮らし(D.L.x.11)にしては、途方もない金額であることが分かる。

一體エピクロスは何を収入として暮らしを築き、「庭園」を經營したのであらう。

Plat.*Epist.*xiii.361A-B、Plut.*Sol.*2、D.L.iii.26、D.L.iv.2、D.L.vi.25によると、授業料(束脩)を取らなかったプラトーンの日常の収入源は無花果、桃金娘、葡萄、橄欖などの果樹栽培と、シケリアのディオニュシオス二世や盟友ディオンの援助にあつたようである。一方、その遺言書(D.L.iv.11-16)から居留外人のアリストテレース自身が師プラトーンの及ばない相當な資産家であつたことが分かるし、マケドニア王家との親密な関係はアリストテレースにその援助と庇護を可能にしたやうである。

それに対してエピクロスには、遺言書(D.L.x.16-22)からその資産にはメリテー區の家屋敷、郊外の「庭園」の他にそれ相當の現金のあつたことが知られる。メリテー區の家屋敷は親の遺産だつたとしても、300巻に上る著書の「印税」は當時なきに等しい以上(箕輪成男『ハピルスが伝えた文明—ギリシア・ローマの本屋たち』出版ニュース社、2002年、177-181頁、参照)、「庭園」の購入費や生活費はどのやうにして賄はれたのか。コロフォーン、そしてミュティレーネーとラムプサコスの足掛け五年にわたる雌伏時代に誰かパトロンに恵まれたとか、あるいは何らかの仕事で小金を蓄へて、エピクロスが移住後のアテーナイでの暮らしの原資となる大金を得たといふことがありえたらうか。藤縄謙三「古

代ギリシア知識人の経済生活」(京都大学文学部紀要15号、1975年、111頁)には、「彼の学園は完全な意味で私立学校であったから、それだけに(歿後の——譯者)学園存続のための経済的基礎について彼は周到に配慮していた」と遺言書の中身が解説されながら、エピクロス存命中のそれまでの「庭園」の成立と収入(束脩)や経営の實態については記述がない。ところで、後代の社中フィロデーモスのある斷片(Usener. 184, Baily. Fr.B.41, Arrighetti. [121])によると、それを要請した時期や期間、また各地の知音や社中の条件は一切不明だが、エピクロスは同派の関係者各人に年毎の「分擔金(σύνταξις)」120ドラクマ=1.2ムナ=36萬円弱を求めたらしい。なぜ120ドラクマが算出されたのかは不明。一方、D.L.x.11では、エピクロスは社中の私産の完全「共產化」を潔しとせず、社中の自由で自前の生活を尊重して、ピュータゴラス派のさうした共產化の遣り口(Iambl.Vita Pyth.80)、つまり當時人口に膾炙してゐた「ピュータゴラス的な生活」(Plat.Rep.600B)を斥けたと、ディオゲネス・ラエルティオスは傳へてゐる。矛盾はないことになる。ただ、エピクロス派がその一派のやうに、権力者の特別な庇護を受けたかどうか、「庭園」を支へたパトロンに恵まれたかどうかは判然としない。N.W.DeWittは史録がないにもかかわらず、推測を逞しくしてさうした権力者の庇護と有力なパトロンの存在を肯定してゐる。註4(10)、參照。

- (9)ティモクラテースは、高弟で「四天王」の一人メートロドーロスの兄弟で、一度はやはりエピクロスの弟子だつた人。後に造反した。Cf. D.L.x. 5, 6, 23.ただし、D.L.vii.2にあるティモクラテースと同一人物かどうかは不明。ティモクラテースが兄、メートロドーロスが弟で、エピクロスに対する歸依の姿勢の違いだけでなく、もともと不和の間柄であつたらしいことについては、Philodem. *De Liber.dice.* xx B.3 & *De ira.xii* を參照。Cf. Parente, *Opere di Epicuro*, pp.502-503

ヘーロドトスもエピクロスの高弟の一人。エピクロスの「第一の手翰」

の受取り人。この手翰は「術理の手引き」とも呼ばれる。D.L.x.31、参照。

- (10)ミトレースはシリア人で、リュシマコスの家政の執事。後にアテーナイに亡命した。Plut. *Contra Epic.*1097B & *ad.Col.*1126Eには、その際のエピクロス派との関りの讒言を交へた言及があるが、エピクロスがミトレースに巻本『病患に處する術理』を獻じた間柄なのは事實だつたやうである。(D.L.x.28) Vgl. Usener, *Epicurea*, S.413. なほ、“ $\Pi\alpha\iota\acute{\alpha}\nu$  (救ひ主アポローンの君)”、“ $\acute{\alpha}\nu\alpha\epsilon\iota$  (御前)”といふミトレースに対する尊稱が、一語の“ $\Pi\alpha\iota\acute{\alpha}\nu\ \acute{\alpha}\nu\alpha\epsilon\iota$  (癒しの神)”で妓女レオンテオンに對して使はれてゐる奇妙な例を D.L.x.5 に見ることができる。

リュシマコス (前360年頃-前281年) はトラキアの出身でマケドニアに移住した、アレクサンドロス王の近衆の一人で、王の歿後トラキアと小アジア北東部ヘレスポントスを支配する (前306年、Diodr.20.107.2によると前302年)、王家の「後繼者」となつた人。トラキアに新首都リュシマキアを建設した。前301年、セレウコス朝と聯携してマケドニア王國のアンティゴノスを驅逐し、小アジア中央部をも領有する「後繼者」の第一人者となつた。専横的支配と苛斂誅求、一族内の不和確執から求心力を弱め、前281年、かつての盟友セレウコス一世の侵攻を受けて戦死した。

史實は一切記録されてゐないと斷はりながら、N.W.DeWittは次のやうに大膽に推測してゐる。(Epicurus, pp.78-81)「後繼者戦争」の動亂の最中、リュシマコスが新首都リュシマキアを建設する前に仮首都をラムプサコスに置いた後に、エピクロスがミュティレーネーから移つて来て、リュシマコスが不在だつたので、家令の異邦人 (シリア人) のミトレースに庇護を求めたのが機縁で、それが後に糾弾される原因になつたといふ。エピクロスは政治に關與せず、慎重にリュシマコスやミトレースの庇護群の端に聯なつたが、權力者たちは強大なパトロンとしてエピクロスを庇護し援助し尊重した。同時に、エピクロスは同地でレオンテウスと妻テミスタ、イドメネウスといふ有力者をも知音として獲得し、

エピクロスがアテーナイに居住してからもその援助を受けた。エピクロスはリュシマコスの愛顧を失ったミトレースがアテーナイに亡命した時、これを庇護した。(Plut. *Contra Epic.*1097B & *ad. Col.*1126E) 一方、エピクロス派の棟梁にアレクサンドリアのプトレマイオス王家の出身者が二人(白人と黒人)が出た(D.L.x.25)のは、存命中のリュシマコスとプトレマイオス王家の関係が良好だった時期の反映だといふ。

もしこの大膽すぎる推測が正しいとすれば、Plut. *ad. Col.*1127A-Eで種々指弾されるやうに、「エピクロスとメトロドロスは、仲間には国家公共の仕事をするのを断念させ、現にそれを行なっている人々には嫌悪の念を抱き、また立法者の中で第一級の最も賢明なる人々を悪く言い、鞭打ちや懲罰の恐怖がついて廻らないなら法を軽蔑するように勧める」(1127E、戸塚七郎譯)といふ指摘は首肯するに足るだらう。このプルータルコスの皮肉や讒言混じりの批評は、従来「非政治性」を眞骨頂とするとされたエピクロスの心術の、むしろ極めて高度な「政治性」を裏書きすることにならう。エピクロスが遺書で「(二十歳そこそこの)白面の青年のとき以来、このわたしと心術とを生きる據り處として(社中や知音の徳望を集めて)きた」(D.L.x.22)と呼んだイドメネウス(恐らくレオンテウスもまた)はラムプサコスの有力政治家だった。エピクロスは當時旭日の勢ひのリュシマコスやミトレース、プトレマイオス王家とも繋がりがある。前295年、デメトリオスがアテーナイを完全包圍して市内を飢餓状態に置いた時、エピクロスは社中を「庭園内で豆を糧食として養った」(Plut. *Demetr.*34)と傳へられるが、しかし「隠れて生きよ(?)」(Λάθε βιώσας、Frag.B.86)の本據地「庭園」は「完全な意味で私立学校であった」(藤縄謙三)のか。プラトーンやアリストテレスが國家や權力者たちの庇護と援助を受けた事態と何も變はらないと言へやう。エピクロスに非政治的な「脱國家的世界觀」はなかつたことにならう。これは正しいのか。

5(1)ヘーロドトスとティモクラテースについては註4(9)、参照。

イドメネウス（前325年頃-前270年頃）はエピクロスの最古参の高弟メートロドーロス（前331/30-278/7）の同郷の義弟（妹バティスを嫁がせた、D.L.x.22）で、ラムプサコスの人。エピクロスの有力な知音の一人。また、傳記作家にして政治家。傳記ではペリパトス（逍遙）派流の、（政敵に對する？）虚實不問の醜聞や逸話中心の糾弾調の語りを得意としたといふ。Vgl. Usener, *Epicurea*, S.408. エピクロスは前342/1年サモス島で生まれ、前270年アテーナイで歿したので、後事を託す遺書を遺された（D.L.x.22）イドメネウスもその直後に他界したものであらう。恐らく遺書が書かれた時、イドメネウスはエピクロスの臨終に立ち會つたのでなく、ラムプサコスに在住だつたのであらう。N.W.DeWittはこのイドメネウスが、レオンテウスと妻テミスタとともに「庭園」の經營を實質的に支へた有力なパトロンの一人だつたと推測してゐる。（*Epicurus*, p.81）實際、Strab.13. 1. 19 (c.589) では、エピクロスと深い親交のあつたレオンテウスとともに、ラムプサコス「市内で最も優れた人々」とされてゐる。註4(10)及び次註5(2)、参照。

τὰ κρυφίαは「esoteric doctrines（秘密の教へ）」と譯されるが、「私生活の不行跡」（von Arnim. Cf. Parente, *Opere di Epicuro*, p.99, n.4）と見る向きもある。「秘密の教へ」と讀むのはプラトーンの所謂「書かれざる教説」からの聯想が働いてゐるのではないか。一方、「私生活の不行跡」はやはり造反したティモクラテースの暴露を例として讀み取らうとしてゐるのではないか。いづれもエピクロスがそれを喜んでこの弟子たちに媚びたといふのはおかしい。拙譯はτὰ κρυφίαを「secrets（不可思議、神秘、謎）」と解して、「エピクロスの云爲が（窺ひ知れぬ神のそのやうに）いかに深遠であるかを」とした。

- (2)レオンテウスと妻テミスタは在ラムプサコスのエピクロスの高弟。息子を「エピクロス」と名づけたことが知られる。（D.L.x.26）エピクロスもテミスタに手翰を多數書くとともに、巻本を獻じてゐる。（D.L.x.28）N.W.DeWittはこのレオンテウスと妻テミスタが、イドメネウスとともに

「庭園」の經營を實質的に支へた有力なパトロンだつたと推測してゐる。  
(*Epicurus*, p.81) 實際、Strab.13.1.19 (c.589) では、エピクロスと深い  
親交のあつたレオンテウスとイドメネウスはラムプサコス「市内で最も  
優れた人々」と語られてゐる。前註5(1)、参照。

- (3)美青年ピュトクレスはエピクロスの「第二の手翰」(天象論)の受取り人。これ以外には何も知られない。イオーニア地方に在住だったのであらう。ラムプサコスかミュティレーネーか。

- (4)νομίξει αὐτῆ παραίνεῖν (libri, Arrighetti) を譯す。  
讀みが一定しないが、補訂には νομίξειν αὐτὴν παρα-  
ίνεῖν (Froben)、νομίξει αὐτὴν περαίνεῖν  
(Bignone)、ὀνομάξει αὐτὴν εἰταίραν (Usener)、  
νομίξει αὐτὴν παρένεῖναι (Kochalsky) があ  
る。諸本、補訂ともに意味が分明でない。

- (5)D.L.ii. 103-104によると、「テオドーロス」といふ名の人20人ゐた。そのうちストア派の「テオドーロス」は三人で、第6番目の(どこの?)人、第18番目のキオスの人、そして第19番目のミーレートスの人。ここでディオゲネス・ラエルティオスの傳へてゐる「テオドーロス」がどの人かは不明。ともあれ、エピクロスの手翰の捏造にせよ、著述による糾弾や讒言にせよ、エピクロス及びエピクロス派に對するストア派の憎惡には根深いものあつたことが分かる。